

保健体育科教育実習生の教員志望、適性評価等の分析

平井佐紀子*，新井猛浩**，家田重晴***，中川武夫***，勝亦絢一***

Teacher Trainee Desire and Aptitude for a Teacher in a Teaching Practicum of Health and Physical Education

Sakiko HIRAI, Takehiro ARAI, Shigeharu IEDA, Takeo NAKAGAWA
and Koichi KATSUMATA

Abstract

In this study a survey was made of the actual conditions of the teacher trainees concerning their desire to be a teacher and the evaluation of their teaching aptitude. Subjects were 703 students who experienced a teaching practicum of health and physical education in the spring term of 1995 or 1997. A total of 554 students responded to both the questionnaires administered before and after the teaching practicum (response rate of 78.8%).

The relationships between the above and other factors such as year of teaching practicum, sex, and course/department of students were also examined.

The main results were as follows:

- 1) Before a teaching practicum 55.5% of students answered that they had "very strong" or "strong" desire to be a teacher, and 32.7% evaluated their own aptitude for teacher as "very suitable" or "suitable."
- 2) After a teaching practicum 64.1% of students answered that they had "very strong" or "strong" desire to be a teacher, and 42.9% evaluated their own aptitude for teacher as "very suitable" or "suitable". Both desire to be a teacher and the evaluation of aptitude to become a teacher improved considerably;
- 3) According to an individual analysis 32.3% of students enhanced their desire through a teaching practicum, while 18.4% of them found it become lower. Similarly, 29.7% of students felt they had greater aptitude, while 15.3% of them found it to be less.
- 4) Concerning their desire, 1995 students indicated higher records than 1997 students, though there was little difference in the evaluation of the aptitude these two years.
- 5) The percentage of male students who answered that they had "very strong" or "strong" desire to be a teacher was nearly 10% higher than among female students before a teaching practicum. However, there was no significant difference in the desire between male and female students.

*大学院研究生, **山形大学教育学部講師, ***教授

- 6) The percentage of male students who evaluated their own aptitude as "very suitable" or "suitable" was about 10% higher than among female students both before and after a teaching practicum.
- 7) The percentage of students who answered "very strong" desire was relatively high in science of physical education course and in the Budo department before a teaching practicum, and after it, the desire was strong in all courses/departments except for leisure sports.
- 8) Concerning aptitude the percentage of students who evaluated as "very suitable" or "suitable" was relatively high in science of physical education course, in department of health education and the Budo department, both before and after a teaching practicum.

I. 緒言

教員養成に関しては、1997年の教育職員養成審議会第1次答申において中学校の教育実習を4週間に延長する案や、教職専門科の単位数を増加する案が示されるなど、改革の必要性が叫ばれており、教育実習のあり方についても今後さらに検討を迫られるであろう。

さて、これまでの保健体育科の教育実習に関する研究としては、実態調査や実習内容の検討^{1) - 8)}、大学における事前事後指導の検討⁹⁾、実習生に対する実習校の評価の検討¹⁰⁾などが行われている。また、教員志望の意欲等に関して調べたもの⁸⁾もあるが、詳細な調査ではなく、教員志望の意欲等に関して実習の前後での変化を調べたものは見当たらない。

そこで、本研究では、保健体育科の教育実習履修者を対象として、教員志望の意欲、教員適性の自己評価（以下、教員適性の評価とする）、及び教員に必要な基本的能力の自己評価に関する調査を、教育実習の前後に行い、その変化の様子を調べた。

また、近年は公立学校教員の採用数が減少しているが、特に最近の採用数の落ち込みは激しい。さらに、1997年度からは、「就職協定」の廃止に伴って会社訪問などの就職活動が早期化している。

加えて、中京大学体育学部においては、1996年度から「3年次進級までに修得した授業科目の平均点が70点以上であること」という教職課程の履修要件が廃止されており、1997年度の教育実習生は、制度変更があった

初年度の学生にあたる。1995年度の教育実習生と比べて、教職課程の履修状況等（表1）に大きな変化は見られないが、この制度変更も教員志望の意欲等にいくらか影響しているかもしれない。

以上のようなことから、学生の教員志望の意欲等に、この両年度で違いの見られることが予想されるので、この点に関しても明らかにしようと試みた。

また、体育学部では、以下に説明するような学科・コース制をとっているが、教員志望の意欲等、及びこれらの教育実習前後における変化に関しては、性別や学科・コースなどの、学生の属性とも関連があるのではないかと考えられる。そこで、これらの関連についても検討することにした。

体育学部は体育学科、健康教育学科、武道学科の3学科から成っており、さらに体育学科は、その専門性により、体育科学コース、競技スポー

表1 教職課程の履修状況

項目	人数 (%)	
	実習年度 1995年度	1997年度
入学者	563 (100.0)	593 (100.0)
3年次教職課程履修者*	414 (73.5)	441 (74.4)
4年次教育実習履修者*	360 (63.9)	391 (65.9)

*…留年者を含む

ツコース、余暇スポーツコースに分かれている。体育科学コースは、主に中学、高校の保健体育科教員の養成を目指したコースであり、教職に関する教科を中心としたカリキュラムになっている。競技スポーツコースは、トップレベルの選手育成、また競技力向上のための指導者などの育成を、余暇スポーツコースは社会的ニーズの高まっている生涯スポーツの指導者や、スポーツ施設経営などに関わる人材の育成を行っている。また、健康教育学科では、保健、衛生などの医学分野にも研究領域を広げ、健康づくりや健康管理の為の指導者などの育成を行い、武道学科では、武道に関する高度な実技能力の養成と幅広い視野を持つ指導者の育成を行っている。

このように、5つの学科・コースは異なった目的を持っており、それぞれにカリキュラムも異なる。全ての学科・コースに於いて教職課程を履修することはできるが、カリキュラムや講義内容の違いから、教職に対する意識についても違いが見られるのではないかと考えられる。

なお、学科・コース別の教育実習の履修状況は表2に示すとおりである。

II. 研究方法

1. 調査対象及び方法

調査対象は、中京大学体育学部の1995年度（以下、95年度と表す）及び1997年度（以下、97年度と表す）の教育実習前期履修者703名である（95年度：男子206名、女子127名、計333名、97年度：男子219名、女子151名、計370名）。調査は、95年度は実習前の5月下旬と実習後の6月下旬に、97年度は実習前の4月下旬と実習後の6月下旬に、いずれも教育実習の事前事後指導の時間中に質問紙法で実施した。なお、実習前、実習後の比較を行うために、調査票に学籍番号の記入を求め、実習前後の両方の調査票に回答が有ったものを有効回答とした。有効回答をした者は95年度では257名（77.2%）、97年度309名（83.5%）であった。このうち、3年次進級の際に留年して

表2 学科・コース別の入学者及び教育実習履修者

人数（%）

項目、学科	実習年度	1995年度	1997年度
		入学者*	
体育学科			
体育科学コース		143	150
競技スポーツコース		226	232
余暇スポーツコース		49	62
武道学科		47	52
健康教育学科		94	98
4年次教育実習履修者**			
体育学科			
体育科学コース		118 (82.5)	129 (86.0)
競技スポーツコース		132 (58.4)	139 (59.9)
余暇スポーツコース		23 (46.9)	33 (53.2)
武道学科		33 (70.2)	29 (55.8)
健康教育学科		54 (57.4)	61 (62.2)

* …合計は表1の入学者数と少し異なっている

**…留年者を含む

いる者12名（両年度各6名）の資料を除外したので、最終的に分析に用いた人数は95年度251名、97年度303名の、合計554名であった（表3）。

その他、大学における学業成績（3年次の保健体育科教育法）、及び教育実習生に対する実習校の評価についても資料を調査した。

2. 調査内容

質問紙の調査内容は、実習校及び実習の概要（実習後）、及び教員志望の意欲や教員適性の評価等に関する項目（実習前・実習後）である。

95年度調査では、属性に関する項目の性別及び学科・コース、その他に関してたずねた。

また、「教員志望の意欲」（自分がどれ程強く教員になりたいと思うか）、「教員適性の評価」（自分でどれ程教員に向いていると思うか）、

表3 調査対象者及び有効回答者

項目	実習年度	人数 (%)	
		1995 年度	1997 年度
教育実習前期履修者	男	206 (100.0)	219 (100.0)
	女	127 (100.0)	151 (100.0)
	計	333 (100.0)	370 (100.0)
有効回答者	男	163 (79.1)	176 (80.4)
	女	94 (74.0)	133 (88.1)
	計	257 (77.2)	309 (83.5)
有効回答者 (留年生を除く)	男	158 (76.7)	171 (78.1)
	女	93 (73.2)	132 (87.4)
	計	251 (75.4)	303 (81.9)

及び「教員に必要な能力の評価」(自分が教員に必要な基礎的能力を備えていると思うか)についてたずねた。

「教員に必要な能力の評価」には、「体力・運動能力について」(6項目)、「知的認識能力について」(12項目)、「社会的能力について」(4項目)、「専門的能力について」(16項目)の計38項目を含んだ。

「教員志望の意欲」及び「教員適性の評価」については、「すごくある」、「かなりある」、「普通くらい」、「多少はある」、「全くない」の5段階の中から、また、「教員に必要な能力の評価」の38項目については、「優れている」、「やや優れている」、「普通くらい」、「やや劣っている」、「劣っている」の5段階の中から回答を求めた(表4)。

97年度調査の質問内容は、95年度と同様のものである。ただし、「教員に必要な能力の評価」の項目については、因子分析を用いて95年度の38項目から9項目に精選した(表5)。

なお、項目の選択には因子分析法を用いた。固有値1以上の第9因子までをバリマックス回転させ、回転後の各因子で因子負荷量が比較的大きい項目($r > 0.4$)の中から、そのグループをよく代表すると考えられる項目を1つずつ選んだ(表6)。

3. 分析方法

「教員志望の意欲」と「教員適性の評価」について、まず実習前と実習後の別に年度による比較をした。また、これらについて、年度を合わせた全体での実習前後の変化、また個人毎の変化についても調べた。

「教員に必要な能力の評価」の項目については、95年度と97年度の両調査に用いた9項目のみを分析した。それぞれ5段階評価を1点～5点の点数に換算して、各項目毎に実習前と実習後について、年度別、及び年度を合わせたものの平均値と標準偏差を計算し、年度を合せたものについては、実習前後の平均値の差も計算した。

また、「教員志望の意欲」及び「教員適性の評価」と対象者の属性(性別及び学科・コース)との関連についても、実習前と実習後の別に集計した。

教育実習生に対する実習校の評価については、「実習評価」を分析に用いた。「実習評価」は合成変数であり、実習生に対する実習校側の評価のうち、「生徒指導」、「学習指導」、「実習態度」に関する個別の評価を点数化して(A:30点、B:20点、C:10点、D:0点)、それらを合計したものである。点数をさらに4段階(A:90点、A-:80点、B+:70点、B以下:60点以下)にまとめて用いた。

なお、以上の分析における統計的検定にはケ

表4 教員志望の意欲や教員適性の自己評価に関する調査項目（95年度）

1. 教員志望の意欲
2. 教員適性の評価
3. 教員に必要な能力の評価
 - 1) 体力・運動能力について
 - (1) 基礎体力
 - (2) 生徒と共に運動ができる体力
 - (3) いろいろな運動をひとつおり楽しめる技能
 - (4) かなり激しい運動ができる体力
 - (5) 体の動きを美しく表現する能力
 - (6) いろいろな運動において示範ができる
 - 2) 知的認識能力について
 - (1) 一般的教養
 - (2) 運動の特性を理解し、説明、指導することができる
 - (3) スポーツの技や練習の方法について説明できる
 - (4) スポーツのルールの解釈や作戦について的確な発言ができる
 - (5) 適切な発問を準備できる
 - (6) 試合の進め方、審判の指導ができる
 - (7) 体育施設、用具の使用ができる
 - (8) 安全に指導できる能力
 - (9) 体育に関する知識を備えている
 - (10) 保健に関する知識を備えている
 - (11) 病気やけがに関する知識を持ち予防策を説明できる
 - (12) 応急処置について理解し、説明、実施できる
 - 3) 社会的能力について
 - (1) 公正な評価をする目をもっている
 - (2) 生徒を観察し、生徒の実態を把握する能力をもっている
 - (3) 的確な判断・決断ができる
 - (4) 生徒に対する思いやりの態度がある
 - 4) 専門的能力について
 - (1) 生徒の意欲を引き出し伸ばせる
 - (2) 体育教師間の人間関係
 - (3) 大きな声で解りやすく話せる
 - (4) 担任としての指導力
 - (5) 部活動の指導力
 - (6) 生活指導のできる能力
 - (7) 個を伸ばす指導力
 - (8) 集団をリードする指導力
 - (9) 教育者としての使命感
 - (10) 生徒に対する教育的愛情（生徒の気持ちを理解できる）
 - (11) いろいろな運動を言葉でわかりやすく説明することができる
 - (12) 生徒の目を見て落ち着いて話せる
 - (13) 板書
 - (14) 学習指導案を作成する
 - (15) VTR、資料を使って授業を進める能力
 - (16) 必要に応じて笛を使える

表5 教員志望の意欲や教員適性の自己評価に関する調査項目（97年度）

1. 教員志望の意欲
2. 教員適性の評価
3. 教員に必要な能力の評価
 - (1) 基礎体力
 - (2) いろいろな運動において示範ができる
 - (3) 一般的教養
 - (4) 試合の進め方、審判の指導ができる
 - (5) 病気やけがに関する知識を持ち予防策を説明できる
 - (6) 公正な評価をする目をもっている
 - (7) 生徒に対する教育的愛情（生徒の気持ちを理解できる）
 - (8) 生徒の目を見て落ち着いて話せる
 - (9) 学習指導案を作成する

ンドールの順位相関 ($Tau-b$) 及びカイ二乗検定を用い、有意性の水準は全て危険率 5 %とした。

III. 結果

1. 単純集計及び年度別比較

1) 実習前の回答

a) 実習前の「教員志望の意欲」(表7)

「すごくある」または「かなりある」と回答した学生は、95年度では 70.6%、97年度では 42.9% であった。また、「普通」と回答した学生は 95 年度では 21.1%、97 年度では 31.0%、「多少はある」または「全くない」と回答した学生は、95 年度では 8.4%、97 年度では 26.1% であった。「教員志望の意欲」については、実習前では 95 年度の方が意欲が高いことが分かった。

b) 実習前の「教員適性の評価」(表8)

「すごくある」または「かなりある」と回答した学生は、95 年度では 35.9%、97 年度では 30.0% であった。また、「普通」と回答した学生は 95 年度では 42.6%、97 年度では 44.9%、「多少はある」または「全くない」と回答した学生は、95 年度では 21.5%、97 年度では 25.1% であった。「教員適性の評価」については、実習前では 95 年度と 97 年度で、あ

まり大きな評価の差はなかった。

c) 実習前の「教員に必要な能力の評価」(表9)

5段階的回答を 1 ~ 5 点の点数として計算したところ、平均値が最も高い値を示したのが、全体では「基礎体力」(3.79 点)、95 年度では同じく「基礎体力」(3.83 点)、97 年度では「生徒に対する教育的愛情（生徒の気持ちを理解できる）」(3.77 点)、最も低い値を示したのが、全体では「一般的教養」(2.70 点)、95 年度では「学習指導案を作成する」(2.69 点)、97 年度では全体と同じく「一般的教養」(2.67 点) であった。

2) 実習後の回答

a) 実習後の「教員志望の意欲」(表10)

「すごくある」、「かなりある」と回答した学生は、95 年度では 74.9%、97 年度では 55.1% であった。また、「普通」と回答した学生は 95 年度では 16.3%、97 年度では 23.1%、「多少はある」または「全くない」と回答した学生は、95 年度では 8.8%、97 年度では 21.7% であった。「教員志望の意欲」については、実習後でも実習年度と評価の間に有意な関連が見られ、95 年度の実習生の方が評価が良いことが分かった。

表6 各因子への因子負荷量が大きい項目(0.4以上)とその中から選択した項目(項目名の前の○印で示した)

第1因子			
知的認識能力	2	(0.59)	運動の特性を理解し、説明、指導することができる
知的認識能力	3	(0.72)	スポーツの技や練習の方法について説明できる
知的認識能力	4	(0.77)	スポーツのルールの解釈や作戦について的確な発言ができる
知的認識能力	5	(0.48)	適切な發問を準備できる
○知的認識能力	6	(0.78)	試合の進め方、審判の指導ができる
知的認識能力	7	(0.58)	体育施設、用具の使用ができる
第2因子			
社会的能力	4	(0.43)	生徒に対する思いやりの態度がある
専門的能力	2	(0.50)	体育教師間の人間関係
専門的能力	6	(0.68)	生活指導のできる能力
専門的能力	7	(0.46)	個を伸ばす指導力
専門的能力	8	(0.54)	集団をリードする指導力
専門的能力	9	(0.72)	教育者としての使命感
○専門的能力	10	(0.64)	生徒に対する教育的愛情(生徒の気持ちを理解できる)
専門的能力	11	(0.58)	いろいろな運動を言葉でわかりやすく説明することができる
第3因子			
専門的能力	1	(0.52)	生徒の意欲を引き出し、伸ばせる
専門的能力	3	(0.70)	大きな声でわかりやすく話せる
専門的能力	4	(0.59)	担任としての指導力
専門的能力	5	(0.61)	部活動の指導力
専門的能力	8	(0.45)	集団をリードする指導力
○専門的能力	12	(0.57)	生徒の目を見て落ち着いて話せる
専門的能力	16	(0.46)	必要に応じて笛を使える
第4因子			
知的認識能力	5	(0.42)	適切な發問を準備できる
知的認識能力	10	(0.45)	保健に関する知識を備えている
専門的能力	13	(0.70)	板書
○専門的能力	14	(0.77)	学習指導案を作成する
専門的能力	15	(0.76)	VTR、資料を使って授業を進める能力
専門的能力	16	(0.55)	必要に応じて笛を使える
第5因子			
○体力・運動能力	1	(0.84)	基礎体力
体力・運動能力	2	(0.84)	生徒と共に運動ができる体力
体力・運動能力	3	(0.56)	いろいろな運動をひととおり楽しめる技能
体力・運動能力	4	(0.83)	かなり激しい運動ができる体力
第6因子			
知的認識能力	8	(0.48)	安全に指導できる能力
○社会的能力	1	(0.77)	公正な評価をする目をもっている
社会的能力	2	(0.71)	生徒を観察し、生徒の実態を把握する能力をもっている
社会的能力	3	(0.60)	的確な判断・決断ができる
社会的能力	4	(0.57)	生徒に対する思いやりの態度がある
専門的能力	10	(0.42)	生徒に対する教育的愛情(生徒の気持ちを理解できる)
第7因子			
知的認識能力	9	(0.55)	体育に関する知識を備えている
知的認識能力	10	(0.60)	保健に関する知識を備えている
○知的認識能力	11	(0.85)	病気やけがに関する知識を持ち予防策を説明できる
知的認識能力	12	(0.84)	応急処置について理解し、説明、実施できる
第8因子			
体力・運動能力	5	(0.67)	体の動きを美しく表現する能力
○体力・運動能力	6	(0.59)	いろいろな運動において示範ができる
第9因子			
○知的認識能力	1	(0.64)	一般的教養

表7 教員志望の意欲の年度別比較（実習前）

教員志望の意欲	実習年度			人数 (%)
	1995 年度	1997 年度	合 計	
す ご く あ る	84 (33.5)	62 (20.5)	146 (26.4)	
か な り あ る	93 (37.1)	68 (22.4)	161 (29.1)	
普 通 く ら い	53 (21.1)	94 (31.0)	147 (26.5)	
多 少 は あ る	15 (6.0)	62 (20.5)	77 (13.9)	
全 く な い	6 (2.4)	17 (5.6)	23 (4.2)	
合 計	251 (45.3)	303 (54.7)	554 (100.0)	

ケンドール Tau-b = 0.256 P < 0.05

表8 教員適性の評価の年度別比較（実習前）

教員適性の評価	実習年度			人数 (%)
	1995 年度	1997 年度	合 計	
す ご く あ る	25 (10.0)	23 (7.6)	48 (8.7)	
か な り あ る	65 (25.9)	68 (22.4)	133 (24.0)	
普 通 く ら い	107 (42.6)	136 (44.9)	243 (43.9)	
多 少 は あ る	40 (15.9)	60 (19.8)	100 (18.1)	
全 く な い	14 (5.6)	16 (5.3)	30 (5.4)	
合 計	251 (45.3)	303 (54.7)	554 (100.0)	

ケンドール Tau-b = 0.057 N.S.

表9 教員に必要な能力の評価の年度別比較（実習前）

項目	実習年度			平均値 (標準偏差)
	1995 年度	1997 年度	合 計	
1. 基礎体力	3.83 (0.83)	3.76 (0.84)	3.79 (0.83)	
2. いろいろな運動において示範ができる	2.84 (0.81)	3.13 (0.85)	3.00 (0.84)	
3. 一般的教養	2.74 (0.73)	2.67 (0.72)	2.70 (0.73)	
4. 試合の進め方、審判の指導ができる	2.86 (0.79)	3.02 (0.85)	2.94 (0.83)	
5. 病気やけがに関する知識をもち予防策を説明できる	3.01 (0.82)	3.01 (0.87)	3.01 (0.85)	
6. 公正な評価をする目をもっている	3.51 (0.69)	3.67 (0.73)	3.60 (0.72)	
7. 生徒に対する教育的愛情(生徒の気持ちを理解できる)	3.67 (0.79)	3.77 (0.83)	3.72 (0.81)	
8. 生徒の目を見て落ち着いて話せる	3.25 (0.90)	3.45 (0.93)	3.36 (0.92)	
9. 学習指導案を作成する	2.69 (0.73)	2.78 (0.71)	2.73 (0.72)	
合 計	3.15 (0.44)	3.25 (0.49)	3.21 (0.47)	

表10 教員志望の意欲の年度別比較（実習後）

実習年度 教員志望の意欲	人数 (%)		
	1995年度	1997年度	合 計
す ご く あ る	113 (45.0)	89 (29.4)	202 (36.5)
か な り あ る	75 (29.9)	78 (25.7)	153 (27.6)
普 通 く ら い	41 (16.3)	70 (23.1)	111 (20.0)
多 少 は あ る	14 (5.6)	48 (15.8)	62 (11.2)
全 く な い	8 (3.2)	18 (5.9)	26 (4.7)
合 計	251 (45.3)	303 (54.7)	554 (100.0)

ケンドール Tau-b = 0.197 P < 0.05

表11 教員適性の評価の年度別比較（実習後）

実習年度 教員適性の評価	人数 (%)		
	1995年度	1997年度	合 計
す ご く あ る	37 (14.7)	48 (15.8)	85 (15.3)
か な り あ る	79 (31.5)	74 (24.4)	153 (27.6)
普 通 く ら い	105 (41.8)	130 (42.9)	235 (42.4)
多 少 は あ る	17 (6.8)	40 (13.2)	57 (10.3)
全 く な い	13 (5.2)	11 (3.6)	24 (4.3)
合 計	251 (45.3)	303 (54.7)	554 (100.0)

ケンドール Tau-b = 0.051 N.S.

表12 教員に必要な能力の評価の年度別比較（実習後）

項目	平均値（標準偏差）		
	実習年度	1995年度	1997年度
1. 基礎体力		3.99 (0.81)	4.06 (0.86)
2. いろいろな運動において示範ができる		3.24 (0.87)	3.40 (0.87)
3. 一般的教養		2.92 (0.65)	2.89 (0.77)
4. 試合の進め方、審判の指導ができる		3.32 (0.73)	3.18 (0.87)
5. 病気やけがに関する知識をもち予防策を説明できる		3.24 (0.75)	3.19 (0.87)
6. 公正な評価をする目をもっている		3.73 (0.79)	3.77 (0.82)
7. 生徒に対する教育的愛情（生徒の気持ちを理解できる）		4.06 (0.81)	4.09 (0.84)
8. 生徒の目を見て落ち着いて話せる		3.91 (0.93)	3.88 (0.98)
9. 学習指導案を作成する		3.31 (0.87)	3.13 (0.93)
合 計		3.52 (0.48)	3.51 (0.51)
			3.52 (0.49)

b) 実習後の「教員適性の評価」(表 11)

「すごくある」または「かなりある」と回答した学生は、95年度で46.2%、97年度では40.2%であった。また、「普通」と回答した学生は95年度では41.8%、97年度では42.9%、「多少はある」または「全くない」と回答した学生は、95年度では12.0%、97年度では16.8%であった。「教員適性の評価」に関しては、実習後でも、95年度の実習生と97年度の実習生の間にあまり大きな評価の差はなかった。

c) 実習後の「教員に必要な能力の評価」(表 12)

平均値が最も高い値を示したのが、全体、95年度、97年度ともに「生徒に対する教育的愛情（生徒の気持ちを理解できる）」（それぞれ4.08点、4.06点、4.09点）、最も低い値を示したのが、全体、95年度、97年度ともに「一般的教養」（それぞれ2.90点、2.92点、2.89点）であった。

2. 実習前後の比較

1) 全体の変化

a) 「教員志望の意欲」(表 13)

「すごくある」または「かなりある」と回答した学生は、実習前では55.5%、実習後では64.1%であり、実習後に1割程度の増加が見られた。また、「普通くらい」と回答した学生は実習前では26.5%、実習後では20.0%、「多少はある」または「全くない」と回答した学生は、実習前では18.1%、実習後では15.9%であった。実習前よりも実習後の方が意欲が高いとい

う有意な関連が認められた。

b) 「教員適性の評価」(表 14)

「すごくある」または「かなりある」と回答した学生は、実習前では32.7%、実習後では42.9%と、1割程度増加した。また、「普通くらい」と回答した学生は実習前では43.9%、実習後では42.4%、「多少はある」または「全くない」と回答した学生は、実習前では23.5%、実習後では14.6%であり、実習後に1割程度の減少が見られた。実習前よりも実習後の方が有意に評価が高くなっていた。

c) 「教員に必要な能力の評価」(表 15)

平均値が高い値を示したのが、実習前では「基礎体力」(3.79点)、次いで、「生徒に対する教育的愛情（生徒の気持ちを理解できる）」(3.72点)、実習後では「生徒に対する教育的愛情（生徒の気持ちを理解できる）」(4.08点)、次いで、「基礎体力」(4.03点)であった。また、実習前、実習後ともに低い値を示したのが、「一般的教養」(2.70点、及び2.90点)、「学習指導案を作成する」(2.73点、及び3.21点)であった。実習の前後で平均値の差が一番大きかったのが、「生徒の目を見て落ち着いて話せる」で+0.54点、次いで、「学習指導案を作成する」で+0.48点、小さかったのが「公正な評価をする目をもっている」、次いで「一般的教養」、「病気やけがに関する知識をもち、予防策を説明できる」等であった。

2) 個人毎の変化

「教員志望の意欲」の個人毎の変化を図1に

表 13 教員志望の意欲の実習前後の比較（全体）

教員志望の意欲	調査時期	人数 (%)		
		実習前	実習後	合 計
す ご く あ る		146 (26.4)	202 (36.5)	348 (31.4)
か な り あ る		161 (29.1)	153 (27.6)	314 (28.3)
普 通 く ら い		147 (26.5)	111 (20.0)	258 (23.3)
多 少 は あ る		77 (13.9)	62 (11.2)	139 (12.5)
全 く な い		23 (4.2)	26 (4.7)	49 (4.4)
合 計		554 (50.0)	554 (50.0)	1108 (100.0)

ケンドール Tau-b = 0.091 P < 0.05

表14 教員適性の評価の実習前後の比較（全体）

調査時期 教員適性の評価	人数 (%)		
	実習前	実習後	合 計
す ご く あ る	48 (8.7)	85 (15.3)	133 (12.0)
か な り あ る	133 (24.0)	153 (27.6)	286 (25.8)
普 通 く ら い	243 (43.9)	235 (42.4)	478 (43.1)
多 少 は あ る	100 (18.1)	57 (10.3)	157 (14.2)
全 く な い	30 (5.4)	24 (4.3)	54 (4.9)
合 計	554 (50.0)	554 (50.0)	1108 (100.0)

ケンドール Tau-b = 0.125 P < 0.05

表15 教員に必要な能力の評価の実習前後の比較（全体）

項目	調査時期	平均値 (標準偏差)		
		実習前	実習後	平均値差 (後 - 前)
1. 基礎体力		3.79 (0.83)	4.03 (0.83)	+ 0.24
2. いろいろな運動において示範ができる		3.00 (0.84)	3.32 (0.88)	+ 0.32
3. 一般的教養		2.70 (0.73)	2.90 (0.72)	+ 0.20
4. 試合の進め方、審判の指導ができる		2.94 (0.83)	3.25 (0.81)	+ 0.31
5. 病気やけがに関する知識をもち予防策を説明できる		3.01 (0.85)	3.21 (0.82)	+ 0.20
6. 公正な評価をする目をもっている		3.60 (0.72)	3.75 (0.81)	+ 0.15
7. 生徒に対する教育的愛情(生徒の気持ちを理解できる)		3.72 (0.81)	4.08 (0.83)	+ 0.36
8. 生徒の目を見て落ち着いて話せる		3.36 (0.92)	3.90 (0.96)	+ 0.54
9. 学習指導案を作成する		3.21 (0.81)	3.52 (0.84)	+ 0.48
平 均		2.73 (0.72)	3.21 (0.91)	+ 0.31

示した。

「教員志望の意欲」が一段階高くなった者は24.9%、また、高くなった者全体では32.3%であった。そして、変わなかった者は49.2%で、一段階低くなった者は15.3%、また、低くなつた者全体では18.4%であった。

細かく見ると、一番多いのが、実習前、実習後ともに「教員志望の意欲」が「すごくある」と答えた者で、次いで実習前、実習後ともに「か

なりある」と答えた者、実習前が「かなりある」で実習後に一段階上がって「すごくある」と回答した者と続いていた。

「教員適性の評価」の個人毎の変化を図2に示した。

「教員適性の評価」が一段階高くなった者は29.7%、また、高くなった者全体では37.7%であった。そして、変わなかった者は47.1%で、一段階低くなった者は12.1%、また、低くなつ

教員志望の意欲	実習前 (%)				
	すごくある	かなりある	普通くらい	多少はある	全くない
実習後	すごくある	22.2	11.0	2.2	0.7
	かなりある	3.4	12.1	8.7	2.5
	普通くらい	0.7	4.9	9.2	4.5
	多少はある	0.0	0.9	5.2	4.3
	全くない	0.0	0.2	1.3	1.8

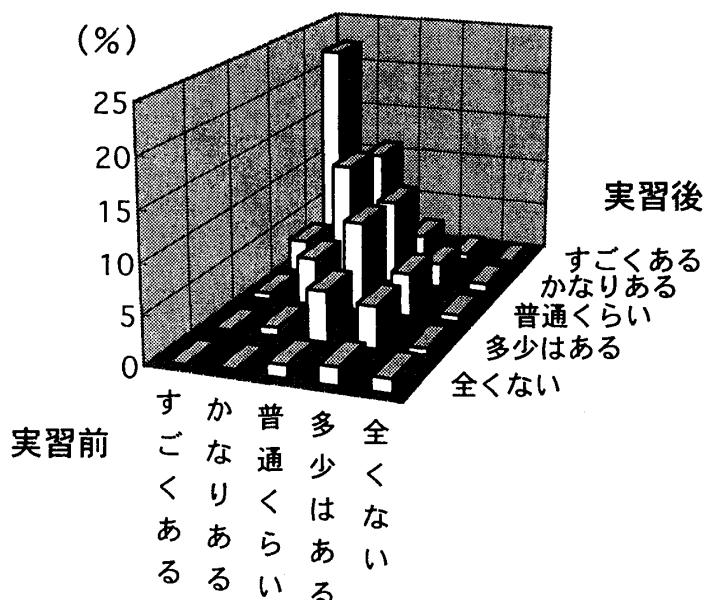


図1 教員志望の意欲の個人毎の変化

表16 教員志望の意欲と性別の関連（実習前）

教員志望の意欲	性別			人数 (%)
	男	女	合計	
すごくある	102 (31.0)	44 (19.6)	146 (26.4)	
かなりある	90 (27.4)	71 (31.6)	161 (29.1)	
普通くらい	82 (24.9)	65 (28.9)	147 (26.5)	
少しはある	47 (14.3)	30 (13.3)	77 (13.9)	
全くない	8 (2.4)	15 (6.7)	23 (4.2)	
合計	329 (59.4)	225 (40.6)	554 (100.0)	

ケンドール Tau-b = 0.100 P < 0.05

た者全体では 15.3% であった。

細かく見ると、一番多いのが、実習前、実習後ともに「教員適性の評価」が「普通くらい」と答えた者で、次いで実習前が「普通くらい」で実習後に一段階上がって「かなりある」と回答した者、実習前、実習後ともに「かなりある」

と答えた者と続いている。

3. 「教員志望の意欲」及び「教員適性の評価」と対象者の属性との関連

1) 「教員志望の意欲」と属性との関連について

a) 「性別」との関連

教員適性の評価		実習前 (%)				
		すごくある	かなりある	普通くらい	多少はある	全くない
実習後	すごくある	5.6	6.3	2.7	0.5	0.2
	かなりある	1.8	11.4	12.1	2.2	0.2
	普通くらい	0.4	5.6	24.4	9.9	2.2
	多少はある	0.5	0.4	3.6	4.3	1.4
	全くない	0.4	0.4	1.1	1.1	1.4

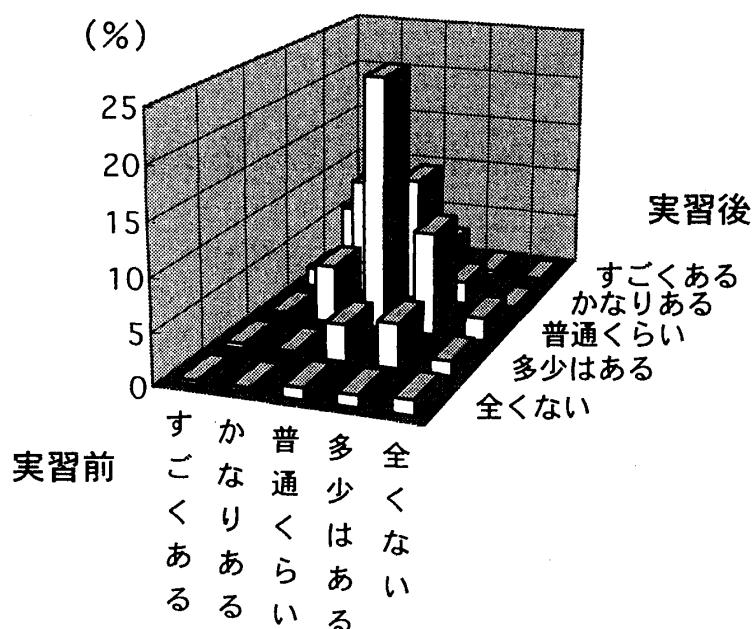


図2 教員適性の評価の個人毎の変化

表17 教員志望の意欲と性別の関連（実習後）

教員志望の意欲	性別			人数 (%)
	男	女	合計	
すごくある	124 (37.7)	78 (34.7)	202 (36.5)	
かなりある	94 (28.6)	59 (26.2)	153 (27.6)	
普通くらい	66 (20.1)	45 (20.0)	111 (20.0)	
少しはある	28 (8.5)	34 (15.1)	62 (11.2)	
全くない	17 (5.2)	9 (4.0)	26 (4.7)	
合計	329 (59.4)	225 (40.6)	554 (100.0)	

ケンドール Tau-b = 0.049 N.S.

実習前に、「教員志望の意欲」に関して「すごくある」または「かなりある」と回答した学生は、男子では 58.4%、女子では 51.2%、「普通くらい」はそれぞれ 24.9%、28.9%、「少しはある」または「全くない」はそれぞれ 16.7%、

20.0% であった。男子学生の方が、実習前の「教員志望の意欲」は有意に高かった（表 16）。

実習後では、「すごくある」または「かなりある」と回答した学生は、男子では 66.3%、女子では 60.9%、「普通くらい」はそれぞれ

表 18 教員志望の意欲と学科・コース別の関連（実習前）

学科・コース 教員志望の意欲						人数 (%)
	体育科学 コース	競技スポーツ コース	余暇スポーツ コース	健康教育学科	武道学科	
す ご く あ る	65 (34.0)	39 (20.5)	1 (2.6)	22 (25.9)	19 (38.0)	
か な り あ る	56 (29.3)	53 (27.9)	15 (39.5)	30 (35.3)	7 (14.0)	
普 通 く ら い	42 (22.0)	61 (32.1)	12 (31.6)	15 (17.6)	17 (34.0)	
多 少 は あ る	23 (12.0)	32 (16.8)	8 (21.4)	9 (10.6)	5 (10.0)	
全 く な い	5 (2.6)	5 (2.6)	2 (5.3)	9 (10.6)	2 (4.0)	
合 計	191 (34.5)	190 (34.3)	38 (6.9)	85 (15.3)	50 (9.0)	

$$\chi^2 = 46.3 \quad P < 0.05$$

表 19 教員志望の意欲と学科・コース別の関連（実習後）

学科・コース 教員志望の意欲						人数 (%)
	体育科学 コース	競技スポーツ コース	余暇スポーツ コース	健康教育学科	武道学科	
す ご く あ る	75 (39.3)	67 (35.3)	6 (15.8)	35 (41.2)	19 (38.0)	
か な り あ る	54 (28.3)	47 (24.7)	12 (31.6)	20 (23.5)	20 (40.0)	
普 通 く ら い	35 (18.3)	38 (20.0)	14 (36.8)	14 (16.5)	10 (20.0)	
多 少 は あ る	19 (9.9)	30 (15.8)	5 (13.2)	8 (9.4)	0 (0.0)	
全 く な い	8 (4.2)	8 (4.2)	1 (2.6)	8 (9.4)	1 (2.0)	
合 計	191 (34.5)	190 (34.3)	38 (6.9)	85 (15.3)	50 (9.0)	

$$\chi^2 = 30.9 \quad P < 0.05$$

20.1%、20.0%、「多少はある」または「全くない」はそれぞれ13.7%、19.1%であった。

実習後の「教員志望の意欲」には、男女差は見られなかった（表17）。

b) 「学科・コース」別の比較

実習前の「教員志望の意欲」の「学科・コース」別比較を表18に示した。

体育科学コースでは、一番多いのは「教員志望の意欲」が「すごくある」という回答で、次いで「かなりある」であった。競技スポーツコースでは、一番多いのは「普通くらい」、次いで「かなりある」であった。余暇スポーツコースでは、一番多いのは「かなりある」で、次いで「普通くらい」、そして一番少なかったのが「すごくある」であった。健康教育学科では、一番多いのは「かなりある」で、次いで「すごくある」であった。武道学科では、一番多いのは、「すごくある」で、次いで「普通くらい」であった。

実習前の「教員志望の意欲」は、学科・コース間で差が見られた。

実習後の「教員志望の意欲」の「学科・コース」別比較を表19に示した。

体育科学コースで、一番多いのは、実習前と同様に、「教員志望の意欲」が「すごくある」という回答で、次いで「かなりある」であった。競技スポーツコースでは、実習前より目立って成績が良くなり、一番多いのは「すごくある」、次いで「かなりある」となっていた。余暇スポーツコースでは、一番多いのは、「普通くらい」で、次いで「かなりある」であった。そして、実習前の回答で一番少なかった、意欲が「すごくある」がやや増加した（実習前2.6%、実習後15.8%）。健康教育学科で一番多いのは、「すごくある」という回答で、次いで「かなりある」であった。武道学科で一番多いのは、「かなりある」で、次いで「すごくある」であった。実

表 20 教員適性の評価と性別の関連（実習前）

性別 教員適性の評価	人数 (%)		
	男	女	合計
す ご く あ る	38 (11.6)	10 (4.4)	48 (8.7)
か な り あ る	89 (27.1)	44 (19.6)	133 (24.0)
普 通 く ら い	136 (41.3)	107 (47.6)	243 (43.9)
多 少 は あ る	55 (16.7)	45 (20.0)	100 (18.1)
全 く な い	11 (3.3)	19 (8.4)	30 (5.4)
合 計	329 (59.4)	225 (40.6)	554 (100.0)

ケンドール Tau-b = 0.154 P < 0.05

表 21 教員適性の評価と性別の関連（実習後）

性別 教員適性の評価	人数 (%)		
	男	女	合計
す ご く あ る	64 (19.5)	21 (9.3)	85 (15.3)
か な り あ る	87 (26.4)	66 (29.3)	153 (27.6)
普 通 く ら い	130 (39.5)	105 (46.7)	235 (42.4)
多 少 は あ る	34 (10.3)	23 (10.2)	57 (10.3)
全 く な い	14 (4.3)	10 (4.4)	24 (4.3)
合 計	329 (59.4)	225 (40.6)	554 (100.0)

ケンドール Tau-b = 0.078 P < 0.05

習後の「教員志望の意欲」についても、学科・コース間で差が見られた。

2) 「教員適性の評価」と属性との関連について

a) 「性別」との関連

実習前に、「教員適性の評価」に関して「すごくある」または「かなりある」と回答した者は、男子では 38.7%、女子では 24.0%、「普通くらい」はそれぞれ 41.3%、47.6%、「多少はある」または「全くない」はそれぞれ 20.0%、28.4%であった。男子学生の方が、実習前の「教員適性の評価」は高かった（表 20）。

実習後では、「すごくある」または「かなりある」と回答した者は、男子では 45.9%、女子では 38.6%、「普通くらい」はそれぞれ 39.5%、46.7%、「多少はある」または「全くない」はともに 14.6%であった。実習後では男子、女子とも評価が高くなつたが、やはり、男子の方が有意に高かった（表 21）。

b) 「学科・コース」別の比較

実習前の「教員適性の評価」の「学科・コース」別比較を、表 22 に示した。

体育科学コースで一番多いのは、教員適性の評価が「普通くらい」という回答で、次いで「かなりある」であった。競技スポーツコースで一番多いのは「普通くらい」、次いで「多少はある」であった。余暇スポーツコースで一番多いのは「普通くらい」で、次いで「多少はある」であった。健康教育学科で一番多いのは「普通くらい」で、次いで「かなりある」であった。武道学科で一番多いのは「普通くらい」で、次いで「かなりある」であった。実習前の「教員適性の評価」と学科・コースとの間には、有意な差が見られ、体育科学コース、健康教育学科、及び武道学科の評価が比較的高く、余暇スポーツコースの評価が低かった。

実習後の「教員適性の評価」の「学科・コース」別比較を表 23 に示した。

体育科学コースで一番多いのは、実習前と同様に、教員適性の評価が「普通くらい」という

表 22 教員適性の評価と学科・コース別の関連（実習前）

学科・コース 教員適性の評価						人数 (%)
	体育科学 コース	競技スポーツ コース	余暇スポーツ コース	健康教育学科	武道学科	
す ご く あ る	25 (13.1)	12 (6.3)	2 (5.3)	7 (8.2)	2 (4.0)	
か な り あ る	50 (26.2)	41 (21.6)	3 (7.9)	23 (27.1)	16 (32.0)	
普 通 く ら い	85 (44.5)	79 (41.6)	24 (63.2)	36 (42.4)	19 (38.0)	
多 少 は あ る	28 (14.7)	43 (22.6)	6 (15.8)	14 (16.5)	9 (18.0)	
全 く な い	3 (1.6)	15 (7.9)	3 (7.9)	5 (5.9)	4 (8.0)	
合 計	191 (34.5)	190 (34.3)	38 (6.9)	85 (15.3)	50 (9.0)	
						$\chi^2 = 29.9 \quad P < 0.05$

表 23 教員適性の評価と学科・コース別の関連（実習後）

学科・コース 教員適性の評価						人数 (%)
	体育科学 コース	競技スポーツ コース	余暇スポーツ コース	健康教育学科	武道学科	
す ご く あ る	40 (20.9)	29 (15.3)	1 (2.6)	10 (11.8)	5 (10.0)	
か な り あ る	48 (25.1)	46 (24.2)	9 (23.7)	32 (37.6)	18 (36.0)	
普 通 く ら い	83 (43.5)	78 (41.1)	21 (55.3)	29 (34.1)	24 (48.0)	
多 少 は あ る	14 (7.3)	27 (14.2)	6 (15.8)	8 (9.4)	2 (4.0)	
全 く な い	6 (3.1)	10 (5.3)	1 (2.6)	6 (7.1)	1 (2.0)	
合 計	191 (34.5)	190 (34.3)	38 (6.9)	85 (15.3)	50 (9.0)	
						$\chi^2 = 29.6 \quad P < 0.05$

回答で、次いで「かなりある」であった。競技スポーツコースで一番多いのは「普通くらい」で、次いで「かなりある」であり、「すごくある」という回答が約1割増加していた（実習前6.3%、実習後15.3%）。余暇スポーツコースで一番多いのは「普通くらい」、次いで「かなりある」であった。健康教育学科で一番多いのは「かなりある」で、次いで「普通くらい」であった。武道学科で一番多いのは、「普通くらい」で、次いで「かなりある」であった。実習後の「教員適性の評価」は、学科・コース間で実習前と同様の有意な差が見られた。

V. 考察

1. 教員志望の意欲について

教員志望の意欲と実習校側の実習生の評価との間には、実習前も実習後も有意な関連があり、

教員志望の意欲に関する今回の調査結果には、ある程度の妥当性があると考えられた。

教員志望の意欲については、意欲の高い者が多かったが、実習前、実習後ともに年度の差があり、95年度の方が97年度よりも意欲が高いということが分かった。また、実習校側の評価の年度別比較でも、いくらか95年度の評価の方が高いという結果が得られたことから（表24）、97年度における意欲の低下を示す結果は、学生の実態を反映したものだと考えられる。

この原因については、公立学校教員の採用試験の合格が極めて困難になったことによる影響が大きいと考えられるが、「就職協定」の廃止に伴う就職活動の早期化が、教職に就くことを早く諦めさせる要因の1つとして働いているとも考えられる。

また、教職課程の履修要件変更による影響については、今回の調査においては、3年次の学

表 24 「実習評価」の年度別比較

評価	年度	人数 (%)		
		95 年度	97 年度	合 計
A		76 (30.3)	79 (26.1)	155 (28.0)
A -		109 (43.4)	113 (37.3)	222 (40.1)
B +		48 (19.1)	70 (23.1)	118 (21.3)
B 以下		18 (7.2)	41 (13.5)	59 (10.6)
合 計		251 (100.0)	303 (100.0)	554 (100.0)

ケンドール Tau-b = 0.094 p < 0.05

表 25 保健体育科教育法（体育科）の年度別比較

成績	年度	人数 (%)		
		95 年度	97 年度	合 計
優（上）		41 (16.7)	63 (21.4)	104 (19.3)
優（下）		88 (35.9)	103 (34.9)	191 (35.4)
良		74 (30.2)	78 (26.4)	152 (28.1)
可		30 (12.2)	33 (11.2)	63 (11.7)
不可		12 (4.9)	18 (6.1)	30 (5.6)
合 計		245 (100.0)	295 (100.0)	540 (100.0)

ケンドール Tau-b = 0.037 N.S.

業成績の年度別比較を少し参考にしたい。

保健体育科教育法（通年）の成績に関しては、97 年度の成績の方がいくらか悪かったが、これは保健科（半期）の成績の差異によるところが大きかった。しかし保健科の成績の付け方が、95 年度と 97 年度では若干異なっていたので、直接比較を行うにはやや難しい面があった。むしろ、体育科（半期）の成績（表 25）に関して両年度でほとんど差がないことを考慮すると、両年度の学生の間に、授業への取り組みに関する大きな差はないのではないかと考えられる。

この結果から、明確ではないものの、教職課程の履修要件変更による影響は、あまり大きなものではないように思われる。しかし、この点については今後さらに検討しなければならない。

しかしながら、97 年度においては教員志望の意欲が少ないにも関わらず教育実習を行った者が全体の 2 割程度もいるという実態が把握され、教職につく意志はなくとも教員免許は取得しておきたい、という学生がいることが推測さ

れる。教職への意欲の低い者は、実習態度に熱心さが欠ける場合があるので、教育実習に意欲的に取り組む気持ちのない者は教職課程を履修しないように、大学における指導を強める必要があるだろう。

次に、教員志望の意欲の実習前後の変化については、年度を合わせて見ると、意欲の高い者が実習後に約 1 割増えて全体の 3 分の 2 近くにもなっていた。また、個人毎に見ると、実習後に意欲の高くなった者が 3 割強も存在した。これらのことから、教育実習で学校現場を体験することにより、教職に対する意欲を高める者が多くいると考えられる。しかしながら、逆に実習後に意欲が低下する者も 2 割弱いるので、意欲低下の原因把握が重要な課題となるだろう。

2. 教員適性の評価について

教員適性の評価と実習校側の実習生への評価を比較すると、実習前ではなく、実習後では関連が見られ、適性評価と実習生への評価に対応があった。これは、実習を通して自己の

適性について考える機会があったこと、及び指導教員から適性に関する示唆を受けることによって、自己の教員適性に関する評価に正確さが増しているのではないかと考えられる。

教員適性の評価については、実習前、実習後ともに年度による大きな差は見られなかった。

次に、実習前後の変化について見ると、教員適性についての評価の高い者が、実習後に約1割増えて4割強になっていた。個人毎の分析では、実習後に評価が高くなった者が4割弱もいた。これらの者は、教育実習での学習指導や生徒指導の経験を通して指導に自信を持つようになり、自己の適性の評価を高めたのであろう。

自己の適性評価と教員志望の意欲は、実習前、実習後、及び実習前後の変化のいずれにおいても非常に大きく関連しており、教員適性の評価と教員志望の意欲は強く結び付いていることが分かった。

3. 教員に必要な能力の評価

教員に必要な能力に関する自己評価には、年度による違いはあまり見られなかった。実習前、実習後ともに「基礎体力」や「生徒に対する教育的愛情」の評価が比較的高く、「一般的教養」の評価が低かった。

実習前後の比較では、すべての項目で実習後に評価が高くなっていたが、平均値の差が大きかった項目は、「生徒の目を見て落ち着いて話せる」や、「生徒に対する教育的愛情（生徒の気持ちを理解できる）」であった。

これらは、実際に現場に立って生徒に接することによって初めて学ぶことができるものであり、2週間ないし3週間にわたる体験を通して、実習生が技能を向上させていったのだと考えられる。また、「学習指導案を作成する」も平均値の差が比較的大きいが、これも同様に、何度も書いて授業に備えるうちに要領が分かるようになったのであろう。

いずれの項目でも実習後の評価の方が良かつたことについては、実習生が、教員として現場に立ち指導することによって、実技や講義の指導、また教育実習そのものに対して抱いていた

不安が解消し、多少なりとも自分自身の能力に対する自信が生まれたのだと言えるかもしれない。

4. 教員志望の意欲等と対象者の属性との関連

1) 性別との関連

性別との関連については、年度をまとめて分析を実施した。

実習前の教員志望の意欲では、「すごくある」または「かなりある」と回答した学生は、男子では58.4%、女子では51.2%であり、男子が女子よりも意欲の高い者多かった。また、教員適性の評価では、実習前に「すごくある」または「かなりある」と回答した学生は、男子では66.3%、女子では60.9%であり、男子が女子よりも評価の高い者多かった。

これらのことから、実習前の段階における教員適性の自己評価が女子において、男子よりも若干低いことが、教員志望の意欲が女子において男子よりもやや低いことにつながっているのではないかと推測される。また、実習前の段階における教員適性の自己評価が女子において、男子よりも若干低いことについては、女子の方が男子よりも特に教員適性が低いと考える理由がないので、女子の方が男子よりも自己についていくらか控え目な評価をする傾向にあるのではないかと思われる。

次に実習後では、教員志望の意欲に関して、女子において評価の高い者がかなり増加し、男子との差がほとんどなくなっていた。また、教員適性の評価については、実習後にも依然として男女差がみられるものの、女子において、適性評価の高い者の割合が、男子の実習前のそれと同程度まで増加していた。

したがって、特に女子で、実習を通して自信を持ち、自己の適性に対する評価を高めることによって、教員への意欲も高めた者の多いことが分かった。

2) 学科・コースとの関連

学科・コースとの関連についても、年度をまとめて分析を実施した。

学科・コースごとの教育実習履修者数及び入

学者に対する割合は、表2の通りである。年度をまとめてみると、教育実習の履修割合は、体育科学コース、競技スポーツコース、余暇スポーツコース、健康教育学科、及び武道学科、各々、84.3%、59.2%、50.1%、59.8%、及び63.0%となっている。この結果、履修割合は、体育科学コースで特に高く、次いで武道学科、健康教育学科及び競技スポーツコースの順で高く、余暇スポーツコースで一番低いことが分かった。

教員志望の意欲については、実習前、実習後ともに、学科・コース間で差が見られた。実習前では意欲が「すごくある」と回答したものが、体育科学コースと武道学科では3割以上、健康教育学科及び競技スポーツコースでは2割台となっており、余暇スポーツコースではほとんどいなかった。

この順は、教育実習履修割合の順とほぼ一致しており、各学科・コースにおける全体の教職への意欲の程度が反映した結果だと考えられる。

体育科学コースは教員養成を目的としたコースであり、教職への意欲が高いのは当然である。武道学科も教員採用試験合格の実績があることから、教職への意欲の高い者がかなり多いのではないか。また、健康教育学科でも、ほとんどが学力入試を受けて入学した者であり、全体として資格取得への熱意が大きいため、教職への意欲の高い者が少なくないのであろう。

また、実習後では意欲が「すごくある」と回答したものが、健康教育学科、体育科学コース、武道学科及び競技スポーツコースで3割以上、余暇スポーツコースでは1割台となっていた。「かなりある」まで合せてみると、武道学科、体育科学コース、健康教育学科、競技スポーツコースの順で、いずれも6割以上ある。

すなわち、実習後には全体的に意欲の向上が見られたが、中でも競技スポーツコースと健康教育学科でそれが顕著であり、武道学科でも意欲の高い者がかなり増加していた。

余暇スポーツコースでは実習後に教員志望の意欲の高い者が若干増えたが、それでも他の学科・コースに比べるとその割合はかなり低かった。これは、余暇スポーツコースがもともと生

涯スポーツの指導者やスポーツ施設経営などに関わる人材の育成など、社会体育や商業体育に関連したコースであり、学校体育とは異なった方向に目的を持つ学生が多いためであろう。

教員適性の評価についても、学科・コース間で実習前、実習後ともに差が見られた。実習前で適性評価の高い者は、体育科学コースで約4割、次いで武道学科と健康教育学科が3割台となっていた。また、競技スポーツコースでは2割台、余暇スポーツコースでは1割台であった。

実習後では適性評価の高い者は、健康教育学科が約5割、次いで体育科学コースと武道学科が4割台、競技スポーツコースが約4割、そして余暇スポーツコースが2割台となった。

教員適性の評価についても、学科・コースの特徴がある程度表れたといえよう。

V. 結論

教育実習生の教員志望の意欲、教員適性の自己評価、及び教員に必要な能力の自己評価の現状及びこれらに影響する要因について検討し、以下のような知見を得た。

- 1) 教員志望の意欲と実習校側の実習生の評価との間には、実習前後ともに有意な関連が見られ、教員志望の意欲に関する今回の調査結果には、ある程度の妥当性があると考えられた。
- 2) 教員志望の意欲の高い者が多かったが、年度別では、95年度よりも97年度の方が意欲が低くなっていた。これには公立学校教員の採用試験の合格が極めて困難になったこと、さらに「就職協定」の廃止に伴う就職活動の早期化等が影響していると考えられる。また、97年度では、教員志望の意欲が少ないにも関わらず教育実習を行った者が2割程度いた。教育実習に意欲的に取り組む気持ちのない者は教職課程を履修しないように、大学における指導を強める必要性が示唆された。
- 3) 教員志望の意欲の個人毎の実習前後の変化を見ると、実習後に意欲の高くなった者が3割強いた。したがって、教育実習で学校現場

を体験することによって、教職に対する意欲が高まる場合がかなり多いといえよう。しかし、逆に意欲が低下した者も2割弱おり、意欲低下の原因把握が重要な課題となる。

- 4) 自己の教員適性に関する評価については、実習において自己の適性について考える機会があったこと、及び指導教員から適性に関する示唆を受けたことによって、実習後に正確さが増したのではないか。また、教員適性の評価が実習後に高くなっているが、これは教育実習を通して指導に自信を持てるようになったためと考えてよいであろう。
- 5) 自己の適性評価と教員志望の意欲は、実習前、実習後、及び実習前後の変化のいずれにおいても非常に大きな関連を持っており、教員適性の評価と教員志望の意欲が強く結び付いていることが分かった。
- 6) 教員に必要な能力に関する評価では、いずれの項目も実習後の評価の方が良くなっていた。これは、実習の経験を持って技能が向上したということに加えて、実習生が、教員として現場に立ち指導することによって、実技や講義の指導、また教育実習そのものに対して抱いていた不安が解消し、自分自身の能力に対する自信が生まれたということが考えられる。
- 7) 性別との関連では、教員志望の意欲については、実習前では男子よりも女子の方が若干意欲が低かったが、実習後ではその差はほとんどなくなった。また、教員適性の評価については、実習前も実習後も男子の方が女子よりも評価がやや高かった。
- 8) 学科・コースとの関連では、教員志望の意欲の非常に高い者は、実習前では体育科学コースと武道学科に比較的多かった。また、実習後では健康教育学科、体育科学コース、武道学科、競技スポーツコースの順に多かった。また、教員適性の評価の高い者は、実習前では、体育科学コース、武道学科、健康教育学科に比較的多かった。実習後では、健康教育学科、体育科学コース、武道学科、競技スポーツコースの順で多かった。

教員志望の意欲、教員適性の評価とともに、学科・コースの特徴がよく表れていた。

謝辞

調査に御協力いただいた中京大学体育学部の教育実習生の皆様、及び教育実習の評価票を分析させていただいた実習校の先生方に深く感謝いたします。

参考文献

- 1) 大津一義、桃崎一政、千葉裕典、木曾俊介、鳥井正史、勝亦紘一：保健体育科教員の養成に関する調査研究 その1. 保健体育科教育実習の実状及び問題点、順天堂大学保健体育紀要, V 22, 1979
- 2) 勝亦紘一、高橋亮三：教育実習に関する調査研究：体育科実習を通しての授業観の変容、順天堂大学保健体育紀要, 22, 16-27, 1979
- 3) 日本学校保健学会共同研究B班：教員養成系大学における保健体育科教育法及び教育実習等に関する第二次実態調査研究、学校保健研究, 23 (10), 463-473, 1981
- 4) 桃崎一政、大津一義、加藤種一、千葉裕典、：保健体育科教員の養成に関する調査研究 その2. 保健体育科教育実習の大学間における比較、順天堂大学保健体育紀要, V 24, 1981
- 5) 桃崎一政、大津一義、千葉裕典、：保健体育科教員の養成に関する調査研究 その4. 教育実習生の生活時間の実態、順天堂大学保健体育紀要, V 26, 1983
- 6) 勝亦紘一、深井一三：保健体育科の教育実習に関する研究：中京大学体育学部を事例として、中京大学体育学論叢, 25 (1・2), 89-104, 1984
- 7) 家田重晴、勝亦紘一、深井一三：保健体育科の教育実習に関する研究 (4)：授業実習の現状及び科目、性別、学校種別、実習期間による差異、中京大学体育学論叢, 28 (2),

- 59-75, 1987
- 8) 家田重晴、勝亦紘一、田川則子：保健体育科の教育実習生の授業に関する構造的分析、
学校保健研究, 35 (12), 599-609, 1993
- 9) 勝亦紘一、家田重晴、田川則子：保健体育科の教育実習に関する研究（5）：事前・事後指導に対する学生の評価と要望、中京大学
体育学論叢, 35 (2), 59-73, 1994
- 10) 新井猛浩、平井佐紀子、家田重晴、勝亦紘一：保健体育科の教育実習生に対する実習校の評価に関する研究－愛知県と他府県の比較を中心として－、中京大学体育学論叢, 39 (2), 89-101, 1998